
黎明の騎士団

ゼータ 如月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黎明の騎士団

【Nコード】

N0212Y

【作者名】

ゼータ 如月

【あらすじ】

かつて、神々は人々にまだ生きる価値の生物であるかの審判を下すため、戦争を引き起こしたことがあった。これを「神伝」と呼ばれる3つの伝記に記されていた。その伝説の中で生きる武器「ソウルブリンガー」は世界のどこかで不気味な光を放ってその使い手を待っていた……。

この物語はとある傭兵騎士団の騎士マルスの物語である。

天の章 1節（前書き）

はじめまして、ゼータ如月と申します。

文章を作る・・・ということがとても苦手なので、何かの勉強になればと思いきり不器用ながらも書いた作品です。

つたない文章ですが、何かあれば感想などいただけたら嬉しいです。
この物語はファンタジーで作られた世界です。

天の章 1節

思えば、すべてはこの剣が始まりだった。

炎を司る神、サラマンダの如く戦果を上げることから傭兵騎士団サラマンダーの名を襲名された俺たちはあの日も数々の戦果を挙げ、国から多額の報酬を得ていた。

俺たちは最強だ、この国に俺たちの右に出るものはいないとまで言われるようにまでなっていた。

魔物退治、戦争、護衛・・・どれも決して綺麗な仕事じゃなかった。もちろん人に恨まれ、逆恨みで襲われたこともある。

しかし、それでも心のどこかで俺はこの仕事に充実感を得ていた。

・・・だがそう思っていた時間は瞬く間に消え去っていった。

傭兵は協会で管理されている団体で、直接的な決定権は団体を管理する国が持っている決まりになっている。

俺達はあの日、王の使いと名乗る女からの依頼で北の山にいるドラゴンを倒してほしいという依頼を受け、山へと向かった。

傭兵団の規模は6人と決して大規模というわけではなかったが、今回竜殺しの依頼、俺達にとってその程度のモンスターなら国の兵士を借りずとも倒せる、そう思っていた。

騎士団長のアヴェンと副団長のオーウェンもそう判断し、俺達傭兵団のみで山へと向かった。

その山は古くから神殺しの剣「ソウルブリンガー」と呼ばれる剣が安置されている。

そのため、この山の名前は魂の山と呼ばれ、普段魔物が強力すぎるためか誰も近づかない聖地になっていた。

俺達はもちろんそんな魔物に苦戦することもなく、山の頂上へとたどり着いた。

「・・・みんな、ここに居るのはこの国で最強の魔物と呼ばれるインペリアルドラゴンだ。」

「ああ、わかつている。ゴッツ、レヴィン、アルファ、マルス、みんないけるな？」

「おう！行こう団長！」

この時、俺達は知らなかった。この山に潜んでいたのはインペリアルドラゴンではなかったということに。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

はあ・・・はあ・・・体が重い、燃え尽きる、熱い・・・。

俺は焦がされた左肩を抑えながら山を下る。

行きしなになぎ倒した魔物が今となっては忌まわしく思うほど強い。血が滴りながら、必至に山を下る。

すべては仕組まれていた、あの女は国の使いじゃない・・・。
一体何者なんだ・・・。

「・・・そうか、あいつは・・・！し、しかし！」

力を振り絞り、山で手に入れた剣を振り回しながら先へと、先へと進む。

かすかに見える村の明かり、俺はさすがのようにその村へと飛び込んだ。

・・・助かった、だが他のみんなはどうなってしまったのか。

「団長、ゴッツ、レヴィン、アルファ・・・みんな・・・。」

数時間前、俺達が山で見たのは竜ではなく、一本の剣であった。

インペリアルドラゴンと呼ばれる竜がいるという伝説は真つ赤な嘘だったのだ。

だが、その山へとたどり着いた瞬間、副団長の様子がおかしかった。

「・・・これが伝説のソウルブリンガーか・・・悪くない。」

「オーウェン、何をやっている？それよりドラゴンなんていないじゃないか。」

みんながざわめきながらあたりを見渡す。

ぎらぎらと輝くものが洞窟の天井でちらついていた。

これは水晶石と呼ばれる鉱石だ。

この薄暗い空洞がこの石によって神秘的に思わせるほどの美しさを放っていた。

「き、綺麗だ・・・。」

「・・・しかし依頼はどうする？竜の首が証明として持ち帰れというのが条件だったな。」

「団長、その心配には及びません。何故なら・・・！」

副団長はソウルブリンガーで団長を切り裂いた。

鎧は裂け、血があふれていた。致命傷だ、この上ない一撃が団長を襲った。

その光景にあっけにとられていたアルファも瞬く間に殺された。

俺とレヴィンは無言で剣を抜き、ゴツツは無言で副団長にタックルを仕掛けて態勢を崩させた。

「うおおおおおお！」

雄たけびと共に副団長を俺は切り倒した。何かもたえるように手を伸ばしながら息絶えたのを俺達は確認した。

それ違いの刹那、俺とレヴィンはたった一度の振りで傷を負った。
レヴィンは致命傷だ。

「レヴィン！しっかりしろ！」

「な、なんてことだ・・・ゴッツ、マルス、お前たちだけでも逃げ
るんだ・・・。」

そう呟くと、糸が切れたかのよう返事をしなくなった。

現実ー引き戻されたゴッツは怒号を上げ、俺も立ち上がって洞窟か
ら飛び出した。

その時、無意識かソウルブリンガーを片手に持っていた。

俺達は無我夢中に走った。

.....

意識が戻ると、そこには暖かい天井が目に焼きついた。

暖色系の、暖かい部屋、暖かいベッド・・・。

ここは天国なのか？そう思った刹那、再び現実へと引き戻されるよ
うに起き上がった。

「・・・ここは？」

「目が覚めたかマルス。俺の家だ、安心しろ。」

隣には包帯で包まれた男がどしんと構えて座っていた。

声でわかる、ゴッツである。

「ゴッツ・・・生きていたのか！」

「ああ、なんとかかな。谷から落ちたときは俺も無理だと思ったが、
運よく生き延びたよ。」

ただ、見ての通りだがな。」

「・・・俺達はどうかやら騙されたようだな。」

「それなんだが・・・お前が寝ている間にいろいろ調べたんだがどうやらそうでもないみたいだ。」

ゴッツは意味深な発言をした。

この時、俺にはこの言葉の意味がまったく理解できなかった。

奴は剣と大きな荷物を手にとると、俺にこの国から立ち去るぞと言葉をかけた。

今回の事件の真相は国を去ってからゴッツから聞かされた。

あの女の正体は国の裏で暗躍する教会と呼ばれる団体の使い。

奴らはどうかやらこの剣の存在を本当に幻のものにするために今回の依頼をしたということだ。

裏切り者のオーウェンは教会の暗部の一人で、俺がそれを知ったのはゴッツから聞かされてからである。

・・・俺たちが襲われたのは口止めが理由である。

「・・・ということは、俺たちが生きていることが知られたら。」

「間違いなく、殺されるだろう。」

ゴッツはそう言いながら酒を口へと運ぶ。

「これから、どうするんだ？」

「どこかで平和に暮らすか、どこかで傭兵をするか・・・後者だとまた命を奪われかねないけどな。」

笑いながらそうゴッツは言った。

この男ほど、俺の神経は凶太いわけではなかった。だが、どこか救われた、そんな気がした。

「なあゴッツ、団長達の仇をとらないか？」

俺は思わずそう呟いてしまった。

だが、ゴッツの顔は満ち足りたような笑顔で俺を見ていた。

「そうだな、逃亡生活になる前に奴らを倒しに行ってもいいかもし
れん。」

なら、俺達の目的は仲間集めといったところか？」

「ああ、そうだな。じゃあ、まず魔術の国と呼ばれるアースへ行こ
う。」

「魔術を扱うものか・・・いいな。よし、いくぞマルス！」

「ああ！」

天の章 2節

学問の街ウィズダム。

ここは世界で最も大きな国立図書館のある街だ。学問に関してはまったく無知の俺にとって、頭の痛くなる街だ。

「ゴッツ、俺達がそんなところへ行っても仕方ないんじゃないの？」

「・・・いや、気になることがいくつかあるんでな。あと古い友人のもとへ行きたい。」

ゴッツがそういいながら、街の奥へと進んでいく。

しばらくすると、薄暗く、古びた建物が多く並んでいる区域へとたどり着いた。

ここはスラム街で、貧富の差があまり問われないこの国では珍しい光景がそこにはあった。

「こんな平和的な国にでもこんな場所があるんだな。」

「基本ここでは裏に手を回して処分を下された人間が集まる場所だ。そんな人間に仕事を与えることを生き甲斐としている奴がいてな。」

案内された場所は”黒魔術研究所”と書かれた看板の建物である。

一見酒場のような見た目をした古びた建物だが、看板にはそう書かれている。

こんな場所では、まともな建物はないのだろう、俺はそう思いながら中へと入った。

「ゴッツか、久しぶり。」

「生きていたか、裏社会の住人にしか頼めない仕事があつてな。」

ゴッツは席につくと、すぐさま大金を机の上へとたたきつけた。フードを被った、恐らく女だろう。その金を手に握り締めながらフードから頭を出した。

「・・・その様子だと、何かあったみたいだね。」

「ああ、ちよつと厄介なことに巻き込まれてな。」

「ふーん・・・、私の知ってる情報だとあんた達は死んだことになっているんだけどね。」

インペリアルドラゴンに葬られた・・・と。」

「やはりか。」

俺は啞然とした。国は既にそういう発表を行っていた。

今の俺達はいわば生きる屍、もうこの世に存在していない人間であることになっていた。

殺したのは・・・存在していないインペリアルドラゴンという設定だ。

船でこの大陸へ向かっている時にゴッツから全てのからくりについて話されていた。

教会は剣の存在を消すため、俺達に仕事を依頼したということはさすがの俺にでも理解できていた。

だが、それは教会の人間にもできることだ。

しかし、それでも奴らは俺達に依頼しなければならない事情があった。

それが俺達の存在だ。

国と俺達の信頼というのはそう簡単に崩れないことは教会も承知していた。

そのため、たとえ剣を消したとしても俺達の存在自体がまず邪魔だったということらしい。

思えば副団長オーウェンははじめからそのつもりで潜り込まされて

いた可能性があった。

「えげつないな・・・、くそっ!」

「そういきり立つな、でどうだ?できそうか?」

「はん、まかせな。・・・というより、今すぐにでもできるよ。」

女はそういいながら、カウンターの下から何かを取り出した。

分厚い書物、地図、見たこともない鉱石。

次々と何かを取り出ししていた。

「こいつが旧神伝だ、そしてその坊やの後ろにある剣がソウルブリンガーかい。」

「あ、ああ・・・。」

「ふーん・・・、大事にとつときな。いずれどういものかわかるさ。」

それとゴツツ、あなたは敵討ちと言っておきながら別のことをやろうとしているのはなんでさ?」

「・・・それ以上に気がかりなことがあってな。それをまず調べたい。」

真実にたどり着いてから、敵討ちをするかを考える。」

「えっ?」

俺は耳を疑った。

たしかに敵討ちを提案したのは俺だ、だがゴツツは目的が違っていた。

「どづいつことなんだ・・・?」

「お前には言っでなかったが、俺はあの時山へ降りれないと悟ってあの剣のあった洞窟へ行ってたんだ。」

そこでまだわずかに息のあった団長から遺言を言い渡されていた。

何か裏がある、それを調べろ・・・と。」

「そんなことが・・・ゴッツ、お前一体どうやって山を降りたんだ？それだと・・・。」

「そいつは今となってはどうでもいい、それでまずやるべきことがあるんだ。」

仲間集めもそうだが、最初にこの旧神伝に記された謎から解き明かす。」

本を開き、まるでわかっているかのようにぺらりとページをめくり始める。

「驚いたたる坊や、この悪ガキガッツは傭兵という力仕事をしているが、元々この国の出身なんだよ。」

だから、頭もいい。」

「そうだったのか・・・。」

「そんなことはどうでもいい、さて・・・と。もうひとつの依頼の方はどうだ？」

「連絡はつけといたよ、東北の村で合流するといい。」

「もうひとつの依頼？」

俺一人話からおいてかれていた。

後で聞くと、ゴッツは俺がアースを目指そうといった時にこの計画を考えていたらしい。

仲間探しのついでに、教会のことを調べることに。

この後街を出て、歩きながら新しくわかったことについて聞かされた。

教会の目的、ソウルブリンガーとは何か・・・。

教会の目的は世界の混沌。

ありふれた世界征服みたいなものか、と俺は最初に考えていた。だが実際は違うらしく、そもそも教会という団体は遙か大昔から存在していることも聞かされた。

彼らはそもそも神を信仰する団体で、主に死に逝く人々に祈りを捧げ、この教会を主として活動していた。

だが、この教会を作ったのは神伝によれば”神”であることが記されていた。

この神伝がもし現実にあつた話である場合、教会の実体は大きく変わってくる。

そもそも教会が作られた理由はテンプルナイトと呼ばれる騎士が魔女狩りを行うためであつた。

魔女狩りを行われた理由については今回の神伝の海の章では不明だったが、教会という団体は元々何かしらの理由でそういったことをやっていることには変わらない。

「しかし、今回その話がどう関係しているんだ？」

「ああ、オーウェンが持っていた聖書がここにあるんだ。」

ゴッツはそう言うと、バッグから聖書を取り出した。

そこには教会の理念について書かれていたらしく、神伝についても触れられていた。

「こいつによれば、今教会がしていることは何かのために世界の混沌を目指しているみたいなんだ。」

ただこの聖書からはその目的までは見えなかった。」

「・・・俺にはさっぱりだ。」

「ただ、ソウルプリンガーを回収するためにあのようなことをした

ことを考えれば、俺の推測はあっているはずだ。」

そう言いながら、ゴッツは聖書をしまった。

もうひとつ、ソウルプリンガーとは一体なんなのか。

神伝にも実は肝心な部分がかかれていなかった。

神伝とは、3部構成になった書物である。

さっきまでの話は海の章の大部分を占めていた協会という団体についての話。

そしてもうひとつが神々と人々の戦いの結末。

だが、神との戦いで切り札とされたのはソウルプリンガーと言つことだけは書かれていた。

「つまり、神を倒すための武器だつてことか？」

「ああ、恐らくな。そして謎と言つのはその武器の正体だ。」

さて、村で仲間と合流したら残り2冊を探すぞ。あの街には海の章しか存在していないからな。

どこかで必ず旧神伝の天の章、そして地の章があるはずなんだ。」

「俺達の国には三冊ともあつた気がするが。」

「新じゃあだめなんだ、あれにはインペリアルドラゴンなどにも触れられている。」

協会が捏造した書物である可能性が高い、だから使えん。」

そついいながら、がしがしと足を進めていった。

話しながら歩いていくと、気づけば村へついていた。

ふと見ると、そこには一人の男が立っていた。

「あんたが俺達の仲間になつてくれる魔術師か。」

「ああ、俺はサファイア。ジュエルカルテットと呼ばれる魔術師団の末弟だ。」

「助かるぜ、けど事情は聞いて仲間になつてくれるのか？」

俺は半信半疑で問いかけた。

サファイアは頷くと、こっちへと歩みかけてきた。

「よろしく頼むぜお二人さん、俺はマミイからはあんたたちの目的が成就されるまでは帰ってくるなっていわれてるからな。」

「ありがたい話だ。」

ゴッツはサファイアと強く握手した。

そのまま、俺達は宿屋へと向かった。

.....

翌朝、俺達は朝一で村から旅立った。

まずはじめに片っ端から図書館の存在している街を回る事となった。

数週間と見て回ったが、めぼしい書物は一切見つかることはなかった。

「ふう・・・旧神伝ってそんなに見つからないものなのか。」

俺はそっぴいなながら、ベッドへ腰掛けた。

ゴッツとサファイアはさっぱりといった顔で酒を口の中へ運んだ。

「ここまで来ると、普通の図書館とかにはないのかもしれないな。」

「ああ、まったくだ。あの人が書物持っていたのが不思議なくらいだ。」

「うーむ・・・、そもそも海の章だけでも何かわかることはないのか？」

俺は唐突にそんな言葉を二人に投げかけた。
ゴツツは何かを思い出したかのように、海の章を取り出してページをめくり始める。

「そういえばそうだ、この書物の情報でもできることがある。まず、こいつを見てくれ。」

羽ペンを取り出し、本に何かをメモし始めた。いくつか数字と文字を並べ、線を引き始める。そしていくつかの地名にペけ印でマークする。俺にはこれが何を示しているかさっぱりわからなかった。俺だけじゃない、横で見っていたサファイアも首をかしげていた。

「今から説明する、この書物に出てくる地名に今すべて印をつけた。」
ゴツツが言うには、書物に書かれた地名は必ず何かがあるから記されている、とのことらしい。

その話には信憑性は高い、何故なら村や城の地名については村としか、城としか書かれていない。
だが、特定の遺跡や神殿にはしっかりと名称が書かれていた。

” 竜の滝 ”

” 虚空の塔 ”

” アース神殿 ”

” トライアングル海峡 ”

「なるほど、ここから一番近いのはアース神殿か。」
「そうだな、ならそこへ向かうか。」

天の章 3節

アース神殿、アース国で古代から存在している建築物。

今となつては国家遺産にも認定されており、観光者に愛された土地だ。

しかし、神殿最深部は未だ魔物が強力すぎるためか誰も踏み入れたことがないことでも知られていた。

俺達はそのアース神殿の奥へと足を踏み入れていった。

世間的に観光地と知られている部屋は古びた神殿と思わせるような小汚さはまったく感じなかった。

むしろ、まめに手入れをしている印象が強く、俺にはこの建物のごがいいのか、さっぱりわからなかった。

だが、實際億のフロアへと進むにつれて、大昔の建物であるような古びた姿がその輪郭を見せ始めていた。

「ここらへんから汚いな、しかも薄暗い。」

「そりゃそうだ、ここから先は管理している団体ですら踏み入れたことのない部屋ばかりだからな。」

しかし・・・ここは聖なる神殿にも関わらずゾンビが多いな。」

サファイアは炎の球を掌でゆらゆらと揺らしながらぼやいた。

彼のおかげで足もとがよく見える。

「ゴツツ、ふと疑問に思ったんだが俺が知っているアース神殿は太陽の神を祀る建物のはずだ。」

だが実際見てみるよ、この建物に描かれている壁画はどう見ても太陽の神を祀るようなものじゃないぜ。」

「・・・たしかにな、旧神伝には太陽については触れられていたから、俺もてつきり太陽の神を祀る建物だと思っていた。」

蜘蛛の巣を切り払いながらゴッツがそう呟く。

サファイアは壁画についてはまったく触れることはない、どちらかというと興味がないように思えた。

だから俺は一度剣を鞘にしまい、サファイアの足を止めて訊ねた。

「お前は どう思うんだ？ さっきから壁画にまったく無関心みたいだが。」

「俺はどっちかというところが多いことの方に引かかっている。ゾンビって早い話、死者だろ？ なら、このゾンビは一体元々何をしていた人間だ？」

言われてから俺とゴッツも疑問に思った。 たしかにここにいる魔物はみなゾンビだ。

だが、ゾンビはかつて人間だった。 それならば、この神殿の奥深くに足を踏み入れたことがないというのは矛盾していた。

何故なら、ゾンビは俺達傭兵にとってはただの雑魚にしかすぎない。

「しかも、ついでに言えばこのゾンビはあんたら二人がいるからこそ倒せている。」

ゾンビにしちゃ、強すぎる。俺は壁画よりそっちの方が断然不思議だ。」

このゾンビが纏っている衣装はほとんどぼろぼろで、何かは見分けがつかない。

倒したゾンビの衣服に触れると、腐っているのかこなごなに砕ける。しかし、あたりに散乱しているものは鉄で作られた何かが多い。

「しかし・・・行く部屋見ると、何かの儀式をしていた。あるいは寝床のどちらかしかない。」

「この最深部には一体何があるんだ……。」

「どうやら、最深部のようだ。見てみる、かなり広い部屋に出たぞ。」

まるで聖堂のような印象がある。

この大きな部屋の左右には椅子が配置されていて、協会と似た間取りをしていた。

中央には祭壇、一人人が横たわれるスペースがある。

その祭壇の上には骨が、そしてその胸には剣が刺さっていた痕跡が残っていた。

「……何かしらの儀式をしていたと見るのが妥当か？」

「だろうか、しかしこの剣の痕……やけに細いな。」

「この形状だと、エクセキューションアーツソードだろうな。」

エクセキューションアーツソード、早い話が処刑をするための剣である。

正確に人を殺すために刃はレイピアのように細い形状だ。さらに斬撃能力はなく、突きだけの能力に特化した剣だ。

「この骨格、女だな。」

「……もしか、このアース神殿は協会の施設か？」

「どういうことだマルス？」

「海の章では、教会のテンプルナイトが魔女狩りを決行したって話があっただろ？」

「ここで行われていたんじゃないのか？」

俺が今いった言葉はこの部屋がすべて物語っていた。

アース神殿が太陽の神を祀る神殿であるというのは表向きの顔。

実際は魔女狩りのため、誘拐した女をここで始末していた。

目的自体はここに来てわからなかったが、これで一つ目の謎が解き明かされた。

「つまり、あのゾンビは全てテンプルナイトか……。」

「いや、それはおかしい。それならば、あのゾンビは何かしらの武器を持っていてもおかしくはない。」

どちらかというと、司祭という印象の方が強かった。

それに、テンプルナイトがここで死んだ理由がわからないことになる。」

サファイアはそう疑問を投げかけると、祭壇へと足を運ぶ。

可愛そうに、そんな言葉を呟くと、ハッと何かに気づいたかのように後ろを振り向いた。

「二人とも、用心しろ！何か来るぞ！」

その掛け声と同時に俺達も剣を抜く。

緊張が走る、今までざわついていた胸騒ぎがぴたりと収まる。鼓動も何も聞こえない。

さっきまでかすかに聞こえていたゾンビの足音ですら響かない。何かがある、俺もそう感じた。

「……違っ！」

ゴッツがそう言うと、サファイアと俺はすぐに脇にある椅子へと飛び乗った。

地中から無数の手が飛び出した。ゴッツはこれにいち早く察知したのか祭壇の上へと飛び移っていた。

「こ、これがこの神殿の最深部へと踏み入れた人間がない理由か

「！」

「ああ、おそろくな。この部屋の下には一体何があるというのだ・
・。」

「……まかせろ。」

サファイアは両手を地面にかざし、紋章を地面へと刻む。

その瞬間、中央の床がぼろぼろと崩れ落ちた。下には大きな空洞が広がっていた。

俺達は目を疑った、そこには巨大なきみの悪い生き物がうようよと蠢いていた。

「ひ、ひとつめの化け物か……！」

「どうやら死体を操っていたのはこいつのようだな。はじめて見たぜ、こんな生き物は。」

「どうする？もう目的は成就された。こいつを倒す必要はない、引くのも手だぜ？」

「……いや、俺達はもしかしたらやってはいけないことをしたのかもしれないな。」

ゴッツは神殿の両壁に貼られた封印に指さした。

この生き物はここに安置されていたのではない、封印されていると指摘した。

「なら……倒さねばならないな！」

「ゴッツ、俺がソウルプリンガーで一撃でしとめて見せる。まわりのゾンビの排除を頼む！」

俺は剣を抜くと、下の階へと飛び降りた。

その着地の刹那、頭上から火の玉が降り注いだ。

サファイアの魔術だ、あの一つ目の魔物のところまでの道ができて

いた。

俺は一気にかけて走り、魔物のもとへと向かう。

途中襲い掛かるゾンビに飛びつき、頭を土台に飛び込んだ。

その真横から他のゾンビが襲い掛かる、がゴツツが上から飛び降り、なぎ払う。

「いまだ！」

その掛け声と同時に一閃、奴の瞳に刃を入れた。

そうすると、一つ目の化け物は苦痛を味わうように暴れ始めた。

俺はそのままその一つ目の魔物の上へと飛び移ると、もうひとつ持っていたショートソードを頭上へ深々と刺す。

さらにもだえる、俺はその瞬間に飛び降り、ゴツツと共に下がる。

まわりにいたゾンビは糸が切れたかのように倒れこんだ。

「二人とも！さっさと上へあがれ！床が緩んでいる、崩れるぞ！」

俺達はサファイアが上からたらししたロープへつかまり、急いで上へと登る。

上から見ていたが、魔物はもだえるように暴れ、その影響で床が崩れ落ちた。

さらに下にも部屋があったみたいだが、その魔物が暴れたことによつて天井が崩れ、埋もれてしまった。

「・・・ちっ、仕方ないか・・・」

しかしあいつは一体なんだったんだ？」

「わからん、しかしこの神殿の謎は深まるばかりだ。

わかったことはテンプルナイト達の活動拠点だったとしか言えないからな。」

「いや、それだけでも十分でかいがな。よく考えてみる、ここが教

会と深い関わりのある建物であるのはわかった。

ということとは、他の場所も同様である可能性が高い。」

「なるほどな。」

ゴッツの言葉に俺は深く頷いた。

サファイアもそうだなと一言、火の玉を再び掌に出し、来た道を戻り始めた。

俺達もその後が続く、当然目的がはっきりとしたからだ。

次の目的地はここから近いのはトライアングル海峡だ。

- - - - -

一ヶ月の時間が流れた。

俺達はトライアングル海峡と竜の滝と二つの場所をまわったが、有益な情報は何一つ得ることができなかった。

トライアングル海峡についてはまず、船で向かったものの何も見つけることができなかった。

それどころか、たしかに特別な何かがあったら違うに違いないが、そこには何もなく、海底にも何もなかったことが地元漁師から聞いて判明したというぐらいだ。

竜の滝も同様だ、こちらは滝の裏に洞窟はあったものの、その先には何もなかった。それどころか、教会に関わるものすら見つからず、それ以外にもあったのはただの錆びた剣が一本あった程度である。念のため、それが何かを調べるために持ち帰りはした。だが、その剣はどこにでもある、ただのロングソードであることがわかったぐらいだ。残されたのは、虚空の塔のみだ。

アース国から遠く離れた砂漠の大地ドラグーンに塔はあることがわかってはいるが、こちらは正確な場所が不明とされており、未だに足取りがつかないままになっていた。

「・・・虚空の塔は情報が皆無だ。」

「ああ、どこにも見つからない。気球からでも塔の存在が確認されていないのはさすがに不思議だな。」

二人はいらいらした様子を見せながら書物にがつついている。

いくつか古代の地図から、最新の地図までもアース国の図書館から持ち出し、使っていた。

俺も同様にいくつかの地図と情報収集を試みたが、なにひとつ有益な情報は得られなかった。

「旧神伝にはこの地にあることが記されていて、新神伝には俺達の大陸ガイアにあることが書かれていた。」

ガイアには実際塔はあるが、あれは虚空の塔ではなく天の塔であることが一般的だ。」

「そして、その天の塔はただの観光名所、そして歴史の浅いことでも知られている。」

だからその塔が虚空の塔であるはずがないんだ。」

俺達はただ溜め息をつくことしかできなかった。

それもそのはず、俺達は虚空の塔のほかにも見つからないものがあるからだ。

旧神伝の天の章と地の章、これも見つからないため、何の手がかりもない。

まさに八方塞だ。

「・・・明日宿を発とう、次は念のために砂漠地帯にも足を踏み入れよう。」

もうそこにあるとしか思えない。」

「そうだな。」

サファイアは息抜きに部屋に置かれた本棚に向かい、本を見始めた。

「何を探してるんだ？」

「いや、気分転換に何か面白い本はないかなと思ってな。」

そういい、本のタイトルをひとつずつ確かめ始めた。

俺とゴッツも一度今のことを忘れて、酒をてにとり、飲むことにした。

だがその瞬間、サファイアが驚いたような声をあげ、本棚から一冊の本を力強く取り出していた。

「おいおい、何を興奮しているんだ？」

「お前達、これを見る！」

サファイアは机に一冊の本をたたきつけた。

そこに書かれていたのは、神伝の地の章。中身をめくるとそこには新神伝地の章とは別のことが書かれていた。

旧神伝だ、目を丸くしてその本をゴッツが1ページ、また1ページを読み始めた。

「な、なんでこんなところに・・・。」

「ここは田舎町だ、恐らく教会が出版した神伝はこんなところにまではこなかったんだろう。」

・・・これは凄い、ソウルブリンガーについてのことがびっしりと書かれている。」

地の章は主に神とソウルブリンガーについて書かれていた。

かつて、ソウルブリンガーとは剣ではなく、何かの鍵であることが書かれていた。

何の鍵かまでは書かれていなかったが、それがあれば神に対抗するための何かも得られることがわかった。

長い歴史の中で、人々はソウルプリンガーは神を倒すための剣であると誤認していて、対神との戦いで使えば人でも神に勝てるかと勘違いをしている。なら、ソウルプリンガーの役割とは何か、そこだけは書物が古すぎて読むことができなかった。

地の章には他にも神という存在についてとあり方についても書かれていた。教会との関わりについては一切書かれていなかったが、神とは一体何か、そこについて触れられていた。神とは人間と違い、完成された力を持つ個体であり、また神には終焉が存在せず、さらには善と悪というものすら存在しない。つまり、人々が一般的に邪神として言われている神々は人がでっちあげた空想であることが書かれていた。かつて人々が戦った神は命を司る神、デストと呼ばれる男だ。

「つまり、神とは一体どういうことなんだ？」

「生まれ持つてから力を持つ個体のことだろう、俺達人間は訓練を積んで強くなる。だが、神は訓練しなくてもはじめから強い、そういうことだ。」

だが、デストが何に対して完成されているかまでは書かれていなかった。神はすべての万物にそれぞれ存在していることも触れられていた。剣がはじめて生まれた頃に、剣の神が。ガイア国が誕生した際にはガイアの神が、とどんな万物にも神が存在しているらしい。その中で、神々は人々が新しいものに命を吹き込むことにストップをかけた。それが、遙か大昔にあった大戦だ。

「しかし、神が増えることってそんなによくないことなのか？」

「それはわからない、この神伝は元々人が書いたものだ、神の考えなんてわかるはずがないさ。」

ゴツツはそういって、この神伝に書かれていることを一蹴した。
俺は首をかしげながら、話の続きを聞いた。

しかし、不思議なものだ。神々と人々が争いをしたことが真実であるならば、ならこの剣は一体どこで、何のために作られたのか。
そして、一体どこの誰が作ったのか。

地の章 1節

・・・物語を遡ること数十年前のことだ。
すべての結末を知った上で語り部となるう。

俺か・・・、俺はゴツツ、すべてが終わり、すべての結末を綴る為に今俺は存在している。

今話そう、あの戦いが起きた根源を・・・。

俺たちは地の章を見つけてから一度ガイア国へと戻り、団長の家へと足を運んだ。

そこには長く、分厚く、古臭い日記がいくつか発見された。

書かれていた内容は・・・かつてガイアが西と東に分かれてた頃のことだ。

そして、悲しい、ひとつの小さな村で起きた襲撃事件。

これが全ての始まりだったことも示されていた。

「・・・アラン！起きろアラン！」

ガイアの国の遙か果ての村で火柱がたつ。

どうも様子がおかしい、傭兵のアランは目を覚ます。

「どうしたアヴェン、血相をかいて・・・って何だこの熱気は！」

「ああ、どうやら敵襲らしいな。相手は誰かわからん、いくぞ！」

剣を手に取り、アヴェンとアランは外へと飛び出した。

アランの息子、アレクはその後姿を追いかけて、共に外へと飛び出した。

戦火は偏狭の村にも飛び移っていた。

当時、ガイア国では西と東で国が別れており、互いにいがみ合っていた。

原因は些細なことだ、巻き添えにされたアラン達にとってはいい話じゃなかった。

だが、戦わなければ生き残れない、そんな生活を強いられていた。

アヴェンはこの頃、傭兵騎士団随一の腕前で評価されており、近いうち村を立ち去る予定だった。

アランは息子を養うため、王都へと移り住む段取りまで来ていた。その矢先のこの襲撃だ。

相手はもちろん東ガイアの連中であると確信し、戦っていた。

「……どうも様子がおかしいな。」

「ああ、お前もそう思うかアラン。こいつら、どつちでもないぞ！」

見たことのないローブを纏った連中が村を襲撃する。

その中で、何人かは東ガイアの腕章をあたりへと撒き散らしていた。

これはどういうことか、はじめは二人は理解できなかった。

だが、戦うたびにその意味に気づき始めた。

「……なあ、アヴェン。これはどう考えても……東ガイアの仕業にするためのものだよな。」

「ああ、間違いないな。……クツ、こいつらは一体何者なんだ！」

「なあ、お前はここから逃げろ！……俺はここに残り、こいつらを食い止める。」

「アラン！お前まさか……。」

アヴェンは驚いた表情で体を止めた。

広がる炎の中、親友から出た言葉に絶句したからだ。

「いいな……ふたつにひとつだ！お前はこの真相を暴け、いい

な・・・。」

「・・・くっ！まかせてくれ、必ず・・・必ずこの事件の真相は明かしてみせる。」

燃え盛る村の中、襲い掛かる何者かを振り払いながら村を後にした。その後、追っては迫ってくるが決死の思いで王都へとたどり着き、アヴェンは生き延びた。

・・・いうまでもないが、この事件が起きてから数ヶ月後、村は悲惨な姿に変わり果てていた。

アヴェンはその絶望の光景を目の当たりにし、涙した。

その数年後のことである。

アヴェン率いる傭兵騎士団サラマンダーは東ガイア国へと独断で突入。

戦いではなく、話し合いで事件の真相を話し合い、西ガイア国の王を差し置いて、傭兵団内での平和調停を結んだ。

その後、西ガイアの国王とは戦いを通して話し合いに持ち込み、同じくして東西合併の意思表示をさせることに成功。

だが、アヴェン自身が親友に託された謎についてはまだ解決しておらず、独断で調査を進めることを裏で行っていた。

この事件の全ては死んだ団長の家の書斎から発見され、俺たちが調査を引き継ぐことを地の章を見つけてから決断した。

・・・そう、この物語はたったひとつの村で起きた襲撃事件がはじまりだった。

俺たちはすべてが終えてからその真相を知り、驚愕した。

だが、団長はどういう思いでその数十年間を生きていたのか。

今となっては俺が知る由はなかった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0212y/>

黎明の騎士団

2011年11月21日21時38分発行